九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

芭蕉の発句推敲覚書

石川，八朗

https://doi.org/10.15017/12307

出版情報：語文研究. 14, pp.22-33, 1962-05-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

芭蕉の発句推敲覚書

石川八朗

一

芭蕉は、句想整わぬ去来に対して、「句とゝのはずんば、舌頭に千転せよ」[註1]と教えたという。

芭蕉自身の場合も、舌頭に千転して苦吟した面影を伝えるものが少くない。「からざけも空也の痩も寒の内」の句に数日腸をしぼったと土芳の『あかさうし』は伝えているが[註2]、現に、初案や再案などが伝わらないだけで、幾多の推敲のあとが想像されるのである。

推敲とは、いわば創作の過程における批評活動というべきであろうか。創作における批評的要素、それは最も意識的であるべきであって、即ち、創作意識の露呈された確かな一面をうかがうに足るものであろう。芭蕉のごとき、その作風が変化に変化を重ねてやまなかった人の場合、それは、彼の時々の詩心の目指す方向をのぞき見る小窓ともなりそうである。

『甲子吟行』中の「馬に寝て残夢月遠し茶の煙」の句は、初案「馬上眠からんとして残夢残月」（『あかさうし』）（『赤冊子稿本』には上五「馬上落んとして」）であり、これを、上五を改めて、「馬に寝て」とし、さらに中七を「残夢月遠し」と改めたという。この中七の改作については、「句に拍子有てよからず」と芭蕉が考えた結果であることを土芳は伝えている[註3]。上五の改作は、ことごとしい字餘りを改めたのであり、中七は、残―残―の口拍子に流れた表現を捨てて、一句の趣向が、内容にあって、外形的な興味によっているのでないことを示そうとしたものにちがいない。

この句の成立した貞享初の一時期前、というのはいわゆる天和調の、字餘りや口拍子の奇嬌な表現の形が迎えられた時期であった。この時期には、芭蕉も例外でなく、ことごとしい字餘りの作が見られるが、貞享初年はそれが定型化へ向う。

芳賀一晶の『丁卯集』（貞享四年刊）や坂上松春の『祇園拾遺物語』（元禄四年刊）などに見られる連歌めいた句作りが流行しつゝあったという指摘や『いつを昔』既に北村湖春が、当風の俳諧を「正風體」という歌学の語を以て称したごとく[註4]、形の上では、やすらかな句ぶりが、一般俳壇においても主潮をなしてきつゝあった時

期なのである。「馬に寝て」の句の定型化や拍子あるをいとった改作の意識は、このような一般の方向と無関係でない。あるいはこれに一歩先んじていたともいえるものであろう。

以上は、句作の時期と推敲の性格との関連を『馬に寝て』の句を例として見たのであるが、この句が、『甲子吟行』の旅中の句であることにも注意する必要があろう。芭蕉にしても江戸における不断日常の句は、当然ながら推敲の過程は残されにくいのである。さきにかゝげた「からざけや」の句のごとく、腸をしぼるほどの苦吟も、その過程は知るよしもない。初案が残されているのは、特殊な場合であって、それは旅中の句に多い。旅に出た芭蕉は、多くの門下や同好の士を訪れて句を残したし、あるいは『ほそ道』の場合のごとく旅に随行者が居て、時々に句を録している。旅した跡に残された句々は、その土地の人々によって録された。(知足「千鳥掛」、「合歓のいびき」、如行「如行子」、「後の旅」、支考「笈日記」、挙白「四季千句」、不玉「継尾集」など)しかも芭蕉は、その後、「甲子吟行」など道の記に意を注いでおり、発句も自ら改作される機会が多かったようである。このことは、この推敲の問題にとって好都合なことであった。それは単に資料を豊富にするというばかりでなく、旅中の句作と道の記執筆という異なる二つの創作の契機の対照関係といった問題も予想させるのである。

以下、いくつかの推敲を経た句に関して考察するが、必ずしも、一つの結論を求めるものではない。芭蕉発句の具体的なありかたをうかがえば足りる。論は自ら、そこから出発して多岐にわたるであろう。が、やはり基礎となるのは、一々の作品の解釈の正しさであることは、言を俟たぬからである。

二

ここでは、『笈の小文』の旅における句作について述べたいと思う。

寒けれど二人旅ねはおもしろき(笈日記)

寒けれど二人寝ぞたのもしき(曠野、如行子、合歓のいびき、泊船集)

寒けれど二人寝る夜ぞたのもしき(笈の小文)

すくみ行や馬上に氷る影法師(笈日記、泊船集)

冬の田の馬上にすくむ影法師(如行子)

(「国語国文学研究第十輯論号と資料」には中七「馬上にすゝむ」)

あま津なはて

さむき日の馬上にすくむ影法師(合歓のいびき)

冬の日の馬上に氷る影法師(笈の小文)

麦まきてよき隠家や畠村(如行子)

麦はえてよき隠家や畠村(合歓のいびき、笈日記、伊良胡崎)

の三つの場合を例として、考察を進める。

「寒けれど」の句は、貞享四年十一月十日鳴海から杜国を訪ねて保美へ行く途次、吉田に一泊した折の吟。この句の異同については、「笈の小文」が原作で、他は伝聞の誤りとする『芭蕉講座』(加藤楸邨氏)(以下『講座』と略称)、『笈の小文』を初案、『如行子』

他の「旅寝ぞ」を後案、「おもしろき」とした『笈日記』は、支考の杜撰とする『芭蕉俳句新講』（熊原退蔵博士）（以下『新講』と略称）と説を異にしている。

『講座』に触れられず、『新講』に他に所見なきを以て杜撰とされた『笈日記』の句は、また真蹟も伝えられていることを聞かない。やはり杜撰とすべきであろうか。

先ず、この紀行の根本資料といわれる『如行子』や『合歓のいひき』に「旅寝ぞたのもしき」の形で見えるので、「おもしろき」の形があったにしても、すぐ改められたことは否めないようである。しかし、「影法師」の句にしても、他の資料とは別個に一句形を録している『笈日記』であってみれば、単に他に所見がないことを以て杜撰ときめつけるわけにはいかないようである。いま、この紀行の間に成った発句で、『笈日記』が収録している句々の性格を他書の句と比較してみると、『笈の小文』と異なるもの、先に掲げた二句の他に、

○香をさぐる梅に蔵見る軒端哉（笈の小文）
　香をさぐる梅に家見る軒端哉（笈日記）
○日は花に暮れてさびしやあすならふ（笈の小文）
　さびしさや花のあたりのあすならふ（笈日記）
○丈六にかけろふ高し石の上（笈の小文）
　丈六のかけろふ高し石の上（笈日記）
○此山のかなしさ告よ野老掘（笈の小文）
　山寺のかなしさつげよ薯ほり（笈日記）
○物の名を先とふ蘆のわか葉哉（笈の小文）
　物の名を先とふ荻の若葉哉（笈日記）
『曠野』と異るもの、「寒けれど」の句の他に、
○さればこそあれたきまゝの霜の宿（曠野）
　さればこそ逢ひたきまゝの霜の宿（笈日記）
　（この中七は『泊船集』にいうごとく誤りであろう。）
○夏来てもたゝ一つ葉の一つかな（曠野）
　夏来てもたゝ一つ葉の一葉かな（笈日記）
○何事の見たてにも似ず三かの月（曠野）
　ありと有たとへにも似ず三日の月（笈日記）
○ひょろ／＼となほ露けしや女郎花（曠野）
　ひょろ／＼とこけて露けし女郎花（笈日記）（以上前書略）

など、独特の句形を多く収めており、また、「寒けれど」「すくみ行や」「妻はえて」の句などもそうであるが、この紀行中の句で『笈日記』によってはじめて世に公になった句は二十句を越える。しかもその中には、

山寺のかなしさつけよ薯ほり（笈日記）
山寺のかなしさ告よ野老掘（田中善助氏蔵真蹟）
物の名を先とふ荻の若葉哉（笈日記）
ものゝ名をまづとふ荻の若葉哉（田中善助氏蔵真蹟）
ものゝ名を先とふ荻のわかばかな（境野五郎氏蔵真蹟）

など、真蹟が現存していて、『笈日記』所収句の根拠を明らかにしている。また真蹟こそ残っていないが、

ごを焼て手拭あふる寒さ哉（笈日記、伊良古崎）
面白し雪にやならん冬の雨（笈日記、千鳥掛）

宮人よ我名を散らせ落葉川（笈日記、桜下文集）

薬のむさらでも霜の枕かな（笈日記、熱田鰹箱物語）

などにうかがえるように、『伊良古崎』（宝暦九年子礼撰）『千鳥掛』（正徳二年）、知足撰『桜下文集』（不詳、稿本、木因の文集）『熱田鰹箱物語』（元禄八年、東藤撰）とそれぞれ後に別個に土地の人によって撰ばれた集に収めるもので、これも「笈日記」のよった確かな資料の存在を思わせる。

これらは支考が序に記したごとく、「たゝに旧遊の地をたつねて、その時のありさまを思ひあはせ、一夜二夜のちぎり捨し所々もその面影をうつし出し」[註5]たものであって、先師曽遊の地を訪ねて、土地土地に残る真蹟や筆録を記していったものが、この『笈日記』であったと思われる。

当面の問題である「寒けれど」の句について見ると、『笈日記』では、「麦はえて」の句の次に「此時は越人も具せられしとかや」と前書して収められており、支考は「越人と吉田の駅にて」と前書した「曠野」の形とは直接関係なく、参照することもなく、この句を収めたと推測される。「越人も具せられしとかや」とは、その地での伝聞であろう。即ち、下五「おもしろき」とする句形も、伝えられて存したという推測が可能となろう。

なお、この形を初案とするのは、『如行子』『曠野』が同形であり、しかもそれが最終案と考えられる『笈の小文』の形により近いものと考えるからである。

さて、第二の例は、芭蕉がいかにはげしく冬田の中を行く自らの馬上の像をそして心象を形象化しようとして苦心したかを示す好例である。

諸説では、『笈の小文』を成案とすること、『講座』、山本健吉氏の『芭蕉』、井本農一氏『芭蕉』（角川古典鑑賞講座）など、ほとんどがこれを認めているが、『新講』のみは、『笈日記』の「すくみ行や」を『笈の小文』以後の改案かとされるが、もし『笈日記』が、後日の刊行だからというのであれば、意味がないと思われる。『新講』が、さきの句の『笈日記』の「おもしろき」を杜撰とするのも、あるいは、この刊年の閲題によるものではないかと思うのであるが。さきにいうごとくその要はないであろう。たしかに『笈日記』には、例えば、『笈の小文』の「日は花に暮れてさびしやあすならふ」が改作されたと考えられるやゝ長い前書を伴った「さびしさや華のあたりのあすならふ」[註6]があるが、これは後年の改作が入ることも勿論ありうるということで、元禄八年刊の故をもって収録した句がすべて改作を経たものと考える必要はないのである。このことはすでに述べた『笈日記』中の芭蕉発句の性格から容易に認められるところである。この「すくみ行や」の場合も従って成案に至る間の一案であると見よう。この句において問題になるのは、さきの句では同形であった『如行子』『合歓のいひき』間の異形の閲題であろう。例にあげた三番目の句も同じ閲題を示している。

『如行子』は、貞享四年十一月五日から十二月五日に至る芭蕉の尾張遊歴中の作品や、編者の吟を集めた稿本である。[註7]また、『合歓のいひき』は、知足の孫である蝶羅の撰にかかるもので、貞享四年冬の芭蕉来訪の折の吟詠のうち、『千鳥掛』に収めなかった芭蕉の真蹟数句を録している。[註8]ともに『笈の小文』の根本資料とされている

もの である。その両書に、掲げたごとく句形の相違が見られる。これはおそらく、句を録した時期の前後によるということ、即ち、芭蕉の推敲の反映であろう。芭蕉のこの間の行程は、あらあら関係事項を抜き出すと十一月四日鳴海の知足亭に着き、十日朝越人とともに鳴海を立って、吉田に一泊、十二日三河保美に杜国を訪れ、数日滞在、十六日夜鳴海帰着、その後鳴海を出て、熱田桐葉亭で、前日から訪れていた如行に逢い、三吟で歌仙一折を残している。即ち、芭蕉が如行に逢ったのは、知足と別れた後のことで、この点からいえば、知足の家に残された真蹟や書留（『千鳥掛』『合歓のいひき』に収められたもの）を前案と見るべきであろうが、はたして、そう単純に前後関係を決定できるであろうか。『如行子』の内容・記述の様相を今少し検討してみよう。

『如行子』の記述は、記された句々の前書によってうかがうに、冒頭の、

貞享四年卯十一月五日鳴海寺島氏美言に飛鳥井亜相の御詠草のかゝり侍りし哥を和す

京まではまた半空や雪の雲　はせを

や

同七日鳴海

寝覚は秋風のさと、呼続は夜明てから、笠寺は雪の降る日

星崎の闇を見よとや鳴千鳥　はせを

などは、芭蕉自身の草稿のうつしのごとく思われるが、十一月十日以後の記述は、少し様相を異にしている。例えば、「寒けれど」の前書は、

参川（ママ）の国いらことといふ所に杜国といひし此道のすき人有、翁むかしよりむつまじくかたり給ひけるゆゑ（ママ）、かの所たづね給ふ道すがら霜月十日の夜よし田にて名古屋の越人を伴ひければ、

これは編者如行の附したものらしいが、次の

同十三日

されはこそあれたきまゝの霜の宿　はせを

麦まきてよきかくれ家や霜の宿　同

と有ければ

冬をさかりに椿咲なり　越人

昼の空蚤かむ犬の寝かへりて　野仁

発句と脇の間に「と有ければ」とあるのは、勿論、芭蕉の手によるものではない。また、如行が編輯の際、かかる語を挿入するとは考えられない。即ち、これは一座した者でしかもすぐ後で如行と逢った越人の手になることは明らかであろう。

如行が芭蕉に逢う十二月一日以前の「如行子」の記述に、すべて越人があらわれていることも注意しておこう。この部分を如行は越人の手控えから写しとったものではなかろうか。

さきに掲げた「寒けれど」の前書は、例外である。この句についてはいわば当事者である越人は、あのような説明を附す要はなかった。如行によって後に書かれたことは、「名古屋の越人」としたり、「野仁」の変名を用いていた杜国が、「杜国」の名で記されていることなどで判断できる。

如行が、芭蕉に逢って以後は、勿論如行自身録している。それ以前のものはさきにいうごとく越人の手控えか何かの写しであろう。

そして越人は、芭蕉と逢う十一月十日以前のもの（『如行子』のはじめの部分）は、知足か芭蕉の書きとめておいたものによったのではなかろうか。『如行子』には以上のごとくに三つの段階があると考えられる。

『如行子』をこのように解すれば、この章の冒頭に掲げて問題とした「影法師」の句、「畠村」の句は、知足亭で芭蕉が遺したより以前に控えていたはずの越人の句稿を写した『如行子』を先案とすべきであろう。即ち、「冬の田の」→「さむき日の」、「麦まきて」→「麦はえて」と改められたものと思われる。

さて、ここで、先の「寒けれど」の、初案に関して疑問が起ってくる。『合歓のいびき』に「たのもしき」であるのは、芭蕉が保美から帰って鳴海の知足亭で書きのこしたものでは、すでに改作されていたということであるが、越人の記した句形のうつしと見た『如行子』に同じ形であることは芭蕉の随行者でありいわばこの句の当事者である越人の記述である以上、私に初案と考えた「おもしろき」（笈日記）の形はあり得なくなるのではないかということである。しかし、以上の事実を認めた上で、なお『笈日記』の形を疑うことができないとすれば、どのような解釈が可能であろうか。吉田でこの句が成った時は、「おもしろき」の形でもよかった。越人もその形で控えた。しかしその後芭蕉が推敲を経て句形を改めた時、「二人旅寝」の当の相手である越人にそれを告げないことがあろうか。『如行子』と『合歓のいひき』とが共通して収める句で異る形のものは、「影法師」「畠村」の二句であるが、これらの句の改案は越人は同行していたにもかかわらず知らされなかった。「寒けれど」の改案が、越人に知らされたのは、やはり越人が一句のモチーフにかかわるところがあったからであろう。

次に、先に掲げた例句を中心に、芭蕉の改作の意図を考えてみよう。

三

〔過度に興にのって作られた句の是正〕

先ず、「寒けれど」の句は、「おもしろき」→「たのもしき」、そして「二人旅寝は」→「二人旅寝ぞ」→「二人寝る夜ぞ」という二度の推敲を経ているこの変化は何を意味するか。

「おもしろき」にしろ、「たのもしき」にしろ、句形が一句の発想の中核「旅寝」の語を中心にして動いていると思われるので、まずこの語をとりあげてみよう。

「旅寝」の語は、和歌連歌に用いられてその伝統を負うものであるが卯辰紀行中の使用頻度や性格は注目すべきものがあるようである。

この頃の芭蕉の「旅寝」の句を発句や脇句に求めると、

時は秋吉野をこめし旅のつと　　露沽

雁のともねに雲風の月　　芭蕉

幾落葉それほど袖もほころびず　　荷兮

旅寝の霜を見するあかざり　　芭蕉

たひ寝よし宿は師走の夕月夜　　芭蕉

旅寝して見しや浮世の煤掃　　芭蕉

花の陰謡に似たる旅寝かな　　芭蕉

などが、わずかな間に次々と生れたのである。芭蕉は、前回の貞享甲子の旅を野ざらしを心に出発したが、やがて江戸へ帰り、その道の記を草しては「旅寝して我句を知れや秋の風」（野ざらし紀行絵巻真蹟）とその所業に自信を得た句を残している。卯辰の紀行はこれをうけて、旅に関しては充分に意識的であり、また前回の旅のあとをたどるという気安さがあって、旅を興ずる心持が強かったと思われる。人に旅人とよばれて出立した、「謡に似たる旅寝」であったのである。これらの句々に現れているところ、後の「月日は百代の過客」にして「世は旅に代かく小田の行き戻り」（笈日記、陸奥千鳥）といったような旅における時間の意識の面を押し出すものでなく、「旅寝」そのものをひたすら意識し、興ずるという態のものであったようである。

「寒けれど」の句も、このような意識の所産であったと思われる。

古来、「旅寝」のイメージは、さむざむとした独り寝というものに連なりやすいようであるが、それが、ここでは、二人の旅寝なのである。これが、俳諧的に把握されて、風狂に興じてみる「おもしろき」として表出された。古典的な旅寝に俳諧的に対比された「二人旅寝」なのである。

天和から貞享のはじめの芭蕉の句に多く風狂人の姿が自己に密着させて見られるようであるが、この「おもしろき」には、それとはやや異って、悲憺感はない。余裕ある興じぶりが感じられる。しかし、表現の面から見れば、「二人旅寝はおもしろき」といった点に興じるに急で、なまであらわな感じを免れない。

おもしろや雪にやならん冬の雨（如行子）

おもしろし雪にやならん冬の雨（千鳥掛）

同じ頃の句作・推敲であるが、このわずかな改案も、「おもしろや」「雪にや」の重複をいとったかと思われることの他に、ことさらな切字の「や」をしりぞけて作者自身のはやりがちに表出された風狂の気分を抑える役割をしているといえようか。また、

いざ出むゆきみにころぶ所まで（松坂屋真蹟）

いざ行む雪見にころふ所まで（曠野、笈の小文）

いざさらば雪見にころぶ所迄（花摘、陸奥千鳥）

は、列記した順に改作が行われたと考えられるが、「いざ出む」→「いざ行む」→「いざさらば」の過程は、やはり直接の表出が抑えられて、円満な表現を得るに至ったものであろう。これなども、風狂の態度をあらわに表出することを抑制するという同じ方向に添った推敲であると考えられようか。「寒けれど」の句において、「おもしろき」が消去された一因がここに見られよう。

ところで、「たのもしき」は、どのような発想の下に現われたものであろうか。独白的な「おもしろき」という表現から、対人的な、心の寄りを見せる「たのもし」の一語により随行者越人への語りかけを内に含んだ表現に変っている。いわば挨拶性が添加されたのである。

〔挨拶句の諸相〕

旅中の句には、また挨拶句も多い。以下、卯辰紀行中における挨拶句の諸相をうかがってみよう。

先に掲げた「畠村」の句について、「麦まきて」→「麦生えて」。

句作の契機は、当時空米売買の件で追放され、閉居の身であった杜国を、寒風の中を二十五里尋ねかえって訪うた。その杜国に対した時のものである。「よき隠家や畠村」は、住む土地や住居への褒美によって杜国に対する慰めの心を見せたものでこの句の中心となる。この上五の推敲も、このモチーフに添うて考えられるべきものであろう。

「畠村」の縁で、当座に属目した「麦」がとりあげられたものであろう。『新講』では、これらの語は、軽く相応じて居ると考えられているが、これは鑑賞の立場からこの程度にとどめられたので、作者の句作意識からいえば、やはり「畠村」という地名によって発想し、その縁で「麦」が撰ばれたものと考える。初案「麦まきて」の意味は、杜国が麦蒔きをしてというのでなく、この畠村は、名に適わしく、一里が麦を作ってといった意であろう。もし実景に対応させるとしたら、「麦まきて」も「麦はえて」も、同じく麦の芽の生えそろった風景であっていいのである。が芭蕉の意図は、表現として「麦はえて」を択んだのである。それは、第一に、麦が生えのびて、閉居の杜国によき隠れ家をもたらすのであり、さらには、麦の芽生えによって希望のようなものを点じ、以て杜国を慰めたものといえようか。が相手が門人の杜国である故か、半ば自分の安堵、喜びの表出となっている。これは、越人を相手とした「寒けれど」の句の「おもしろき」における場合と類似するようである。

香を探る梅に家みる軒端哉（笈日記）
香を探る梅に蔵見る軒端哉（笈の小文）

ものゝ名をまづとふ荻のわかば哉（境野氏蔵及び田中氏蔵真蹟、笈日記）
物の名を先とふ芦のわか葉哉（笈の小文）

藪椿門は葎のわか葉哉（田中氏蔵真蹟、笈日記）
いも植て門は葎のわか葉哉（笈の小文）

三句のうち、後二句は、真蹟の句形が初案であることは論をまたないところであろう。「香を探る」の句も、『新講』で、『笈日記』の句を初案とされるが、さきに述べた同書の性格から、これに賛同することができる。ともに、おそらく挨拶の場で出されたままの句形と考えていいであろう。そして改案の句は、全て『笈の小文』の句である。

挨拶の句は、大むねその場の景物をとりあげて詠むもののようであるが、それが、後に推敲を経て別の形をとる場合、ほとんど、それが最初に生まれた挨拶の場を離れているのが、旅においては常であろう。その場合に、その挨拶の場の実景景物が推敲の場にまで持ちこまれて新たに句の中に位置を占めるということがあったであろうか。おそらく特殊な場合でなければ、まずありえないことではなかろうか。

あるいは挨拶の句は、本来一度きりで詠み捨てにされるもので、推敲など受くべき性格のものでなく、芭蕉の場合が特殊なのであろう。即ち芭蕉が道の記執筆を意図したための特殊な産物と考えられ

るのであり、そこに現れる言葉は、かっての挨拶の場とは没交渉に、といってわるければ、そこから規制されることなく自由な、芭蕉の表現の意図が、強くうかがえるものではなかろうか。

「梅」の句は、『笈日記』に「防川亭」と前書がある。即ち、防川への挨拶句なのであるが、『新講』では、「家見る」を新居の結構を見る意に解されている。この説によれば、句は、挨拶の場の、特殊な状況をとりあげていることになる。が、推敲句は、同書に「蔵の方が防川の家の富を象徴するものとして、もっと効果的だったから」とするのに従うべきだと思うが、ここでは、初案の特殊な事情（新居であること）は考慮する必要のない形となっている。

「物の名」の句については、境野氏蔵真蹟に、「いせにて竜尚舎と云ける有職の人に逢て」とある。竜尚舎は、伊勢外宮の祠官で、内外典に通じ博学の人であったといわれる。[註9] 句は、「難波の芦は伊勢の浜荻」を踏んで、伊勢に来て有職の人竜尚舎に荻の名を問うたというのであるが、最初は、「伊勢」にとらわれて、「荻」としたのであろうか、後にこの点をいとったものか。このような句には最初から場の性格が句の趣向を規制してしまっているのでさしたる変化は期待できないかもしれない。

「葎」の句は、真蹟に「二乗軒と云草庵会」と前書があり、二乗軒という人については未詳であるが、草庵に住む人への挨拶として、「葎のわかば」がとりあげられたのである。庵住みの人に対するもので、さきの防川に対する「梅に家見る」の場合とは対照的であることが注目されよう。

「葎」は、門と熟し、宿と熟して歌語として用いられ来った言葉であるが、ほとんど荒れはてた宿を表わして、そのままでは挨拶の言葉にはならないであろう。芭蕉が「若葉」とした所以である。「葎若葉」については、芭蕉は、これより少し後（元禄二年といわれている）、茅屋の絵に、「むぐらさへ若葉はやさし破れ家」の句を讃した。同じ褒美の心が、この「葎若葉」にも籠められていると思われる。草庵には適わしいのである。

初案の上五「藪椿」は、位において、「葎若葉」に適わしい。おそらくは庵主を「藪」という隠棲の意を冠した椿に擬したものか。が、その場合、「藪椿」と「葎若葉」とは、ほとんど同義の反復に似る。「椿」はおそらくはその場での属目であろうが、この二つの物の取合せは、挨拶の意によりすぎた感がある。やはり、挨拶の場に忠実であろうとした結果ではなかろうか。この程度にあらわに寓しないと、挨拶の意が通じず、意味がなくなるというようなこともあろう。

改案においては、葎の門の若葉を残し、上には、芋畠を点出して「いも植て」としたのである。

『講座』では、「草庵の矚目そのまゝの景」としているが、この句が、当座の作ではないので、単純にそう見るのはいかがかと思われる。即ち、実景でなくて、景気を匠んだと見ることもできる。推敲句であるこの場合むしろそう見るのが妥当ではなかろうか。実景でないとすれば、この「いも植て」は、どういう点から発想せられたものであろうか。

初案における上五「藪椿」を、さきに述べたように、隠棲している庵主に擬して考えたが、改案においても、言うまでもないが、一

句を、「二乗軒」における挨拶句として考えていたようであるから（改案『笈の小文』所収句の前書に「草庵会」）、改案の上五もまた何らかの意味で庵主の性格を示す言葉を用いたのではないかと考える。「いも植て」は、どのような風に、人間的なものを示しているのだろうか。

芭蕉の「芋」の句には、例えば、

種芋や花のさかりに売ありく（己が光）[註10]

があるが、句意は、『新講』所引の『蒙引』に「花の盛にたねをうり、芋のさかりに月を見る、質物なから月花に縁あるものとの感なり」とし、顕原博士も、この説をとられる。「質物ながら月花に縁あるもの」とは、また菴住みの風雅人のことでもあろう。『類船集』には芋の項に「禅僧」をあげ、あるいは「懶残禅師も盛親僧都も芋をこのみし名僧也」と記している。懶残は唐代の高僧明瓚であるが、よりよく知られていたと思われるのは、『徒然草』に見える「盛親僧都」である。同書に、世をかろく思い、無欲で万事自由にふるまった事を述べている。後の註釈書にも、多くその無欲と自由無碍の態度を称しているが、例えば林維山は『徒然草野槌』に、懶残の例をあげ、「物くいたければくいむたければ昼も眠るは彼飢喫困睡に同じ宗の法灯たるは彼嶽頭一生禅にひとしかるべし有難き無欲の人也けり」といい、岡西惟中も『徒然草直解』に、この盛親僧都の一段に、『荘子』知北遊篇の一文を思いうかべて、[註12]道に達した者のとらわれない態度を考えたようである。

私は、「いも植て」の一句に、この人の面影を読みとろうとしているのではない。そのような試みならば、おそらく無駄にちがいないが、さきにいうごとく、上五に、何らかの人間像を考えるとすれば、芭蕉の「種芋や」の句の例もあり、菴住の人への褒詞として、「いも」を植えている人に、以上のような意味の匂いを読みとる必要があるように思われる。私はさきに、この句を実景ではないものとして扱ったが、芋畠が実景としてあったとしても、もとよりそこには選択が働いているはずであり、実景であるというのみで改案に採りあげられるということが考え難いのであれば、やはり如上の解釈が許されよう。勿論のことであるが、素材が実景であることと、表現が景気的であるのとは、同じでないはずである。私はこの句を挨拶の、明確な意図をもられた言葉が選ばれ、景気的表現をとったものと考えたいのである。

以上、挨拶句というその発想が場の規定を受けやすいものの、推敲という、一応具体的な場をはなれて行われると思われる作者の内部の問題について考察したのであるが、いかにも叙景的でありながら、単なる実景の描写ではないという平凡な結論に達したようである。だが、挨拶句と叙景句の問題は、『おくのほそ道』の旅において、

五月雨を集めて涼し最上川（俳諧書留、真蹟もがみ川）

さみだれを集めてはやし最上川（おくのほそ道）

涼しさや海に入たる最上川（俳諧書留）

暑き日を海に入れたり最上川（おくのほそ道）

の改作に明確にあらわれてくる。この問題は、芭蕉俳句の構成の問題にも連なるように思われるが、この課題については、別に考察を

加えたい。

〔文章中の発句について〕

最後に、もう一つ異った面から見てみよう。再び「寒けれど」の句を例にとる。「二人旅寝ぞたのもしき」（曠野）→「二人寝る夜ぞたのもしき」（笈の小文）。

前案へは、旅中早く改作されたらしいことはさきに述べた。更級紀行に越人を伴い、『曠野』へ序を送っている芭蕉の動きから見て、旅の後も荷兮らと文通などあったことは当然推察できるが、それにもかゝわらず、ここにかかげた後案に改めていないのは、まず「二人旅寝ぞ」の形で句としては必ずしも不満でなかったと考えてもよさそうである。「二人寝る夜ぞ」への改作は、あるいは『笈の小文』という紀行文の制作と関連がありはしまいか。

「旅寝」の句は、『笈の小文』には、もう一句見える。

旅寝して見しや浮世の煤払

「煤払」という浮世の業と対置された「旅寝」。この語の、芭蕉のこの時期における性格については先に述べた。この二つの「旅寝」を並べた時、芭蕉は、「寒けれど」の「旅寝」を捨てた。「おもしろき」であれば、「旅」を表面に出すことは欠かせないであろうが、「たのもしき」と改め、しかも道の記に記すのに、必ずしもそれは要しなかった。一句はここでは「二人」が中心となっているのである。

かれ芝やまだかけろふの一二寸（曠野）

枯芝ややゝかけろふの一二寸（笈の小文）

も同じ事情が考えられる。

『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』（志田）『新講』（頴原）『講座』（加藤）などは、すべて「やゝ」をよしとし、「まだ」では叙情に乏しく、傍観的限定的といわれるが、そういった語感そのものが近代風のものでありすぎるのではないか。芭蕉が、明確に「まだ」に不満を持って改めたかどうか。というのは、この句「笈の小文」では「春たちてまだ九日の野山かな」の次に置かれている。並記した二句に「まだ」があるのは好ましくないであろう。従って、「やゝ」と改めたのではないか、私には、「枯芝ややゝ」と「や」が三つも続くような改作は、必ずしも成功とはいえないと思われる。芭蕉が強いてこの改作をしたのは、やはり、さきのやうな理由が考えられねばならないのではなかろうか。

「影法師」の句の推敲。その過程は先に見たとおりである。山本健吉氏はこの推敲を、「冬の田の形象を切り捨てモチーフを統一し強化する試み」（『芭蕉』）とされる。そのとおりであるが、初案「冬の田の」は、決して芭蕉の心中から消えたわけではなかった。『合歓のいひき』の「さむき日や」には「あまつ縄手」の前書があり『笈の小文』では、「あまつ縄手田の中に細道ありて海より吹上る風いと寒き所也」に続いて句がある。『笈日記』の上五「すくみ行や」にしても、「冬の田」の背景を予想しているのである。成案「冬の日の」を収める『笈の小文』では、句の背景として不可欠の「冬の田」の要素を前文に文章化することによって、モチーフの統一ができたといっては強弁にすぎようか。

前の二句と異って文章の中に句を入れることによって、一句想中に存した二元的な契機を統一できた例である。

芭蕉は、「笈の小文」の冒頭に、道の記のあるべき姿を記してお

り、また、「笈の小文」と平行して、短い文章に句を附したものをいくつも残している、その序（砂石子）によれば、この道の記は、「道すがらの小記を集て」、この名を附したものである。宮本三郎氏は、「野ざらし紀行」の場合に比して、文章が発句と並んで同量の重量感をもつに至っているといわれるが、[註14] 芭蕉はおそらく、句の配置や句と文章の関係などについても腐心するところがあったと思われる。発句の側からうかがっても以上のような芭蕉の心遣いが読みとられるようである。

註 ①岩波文庫「去来抄三冊子旅寝論」32P
②同右114P
③同右106P
④其角全集148P
⑤俳書大系『蕉門俳諧後集』3P
⑥早く『芭蕉句選年考』（石河積翠）に「日は花にはちとむつかしく風骨ひくければ最初の吟なるべし、後に淋しや花のあたりと調練して幽玄に風骨高し」と見える、新しい評釈書も『芭蕉講座』発句篇中122P、一時間文庫『芭蕉』17P、角川古典鑑賞講座『芭蕉』152P、など同意見である。
⑦国語国文学研究論考と資料（名古屋国語国文学会）第十輯、「如行子」飜刻解説（山本平一郎）
⑧『俳文学考説664P、同書所収「知足斎日々記抄」附録56—58P
⑨日本古典全書『芭蕉句集』頭註78P、『国学者伝記集成』によれば、竜淵近、通称伝右衛門、道具、尚舎と号し、「伊勢ノ人、京ニ講説シ、神道ヲ唱フ」とある。元禄六年没、七十八才。
⑩『岨の古畑』（梅員撰、元禄十六年刊）に真蹟によった「いもたねや花の盛に売ありく」の句形で出る。また『赤冊子草稿』に、『己が光』の「花のさかりに」は、「を」が正しいとするように、正しい句形は定めがたい。
⑪『徒然草野槌』上之五、（国文註釈全書76P）に「編年通編」などを引用紹介している。
⑫『徒然草直解』に、「荘子　知北遊子知道乎無窮曰吾不知是一段之心」と頭註する。
惟中は、盛親僧都をこの篇中に見える無為謂に擬してその、道に達した人であることを示そうとしたものであろう。
⑬日本古典文学大系「芭蕉文集」解説16P